

小倉右一郎の三氏が推薦された。次いで十二回文展には、堀進二、齋藤素巖、「明治四十五年東京美術学校卒」、池田勇八〔同四十年同〕、長谷川榮作、北村正信、吉田三郎〔同四十五年同〕の六新人が特選されるなど、時代の進運も窺はれるが、朝倉氏審査員となつてからの活躍ぶりは愈々鮮やかになつて来た。併し、ここに至るまでには、彫刻界の新舊勢力の争ひも益々顯著になつたので、現に大正七年四月には、朝倉文夫氏を筆頭に、小倉、北村西望、内藤伸、石川確治〔明治三十八年東京美術学校卒〕氏等の新進が、『蠻土拉社』^(マンドラ)を創立し、自づから新人の舞臺となつた。尤も、これは、さういふ意味よりも彫刻の普及、小品展といふが目的だったので最初は新海竹太郎氏等の元老も加はつてゐたのを感情の行違ひで自然離れて了つたのらしい。

大正八年、文展が帝國美術院と改まるに至り、新審査員として北村西望、建昌大夢氏等入り、元老即ち會員となつた高村光雲、新海竹太郎氏は退いて後見役に廻つた。それでこの度こそ新舊勢力の均分が出来たわけであるが、朝倉氏はやはり他の人々によつて孤立の地位に立たされたかの觀あつた。第二回には、内藤伸氏、第三回には堀進二、池田勇八氏審査員となつた。即ち、大勢の趨くところ極めて自然であつたが、内藤氏を除く他の人々は結束して反朝倉の態度に出たのである。その理由とする所は朝倉は横暴だからといふのである。これは數の上から云つても變なもので、一方は二人に對し他方は七八人の結束でその中の一人が横暴で仕方ないから脱會すると迄意氣込んだのは一奇と云へよう。これには、院長の森嶋外博士も呆れ返つて罷める者は罷めよの態度に出たので却つて事なく濟んだらしい。第三回までこの類の争闘

は止まなかつた。

一方、朝倉氏は、斯やうな傾向の新人を導くに不適切なのを覺り、自ら率先して『東臺彫塑會』を起し、小倉、齋藤、石川氏等東京美術學校出身の錚々たる人々を中心に彫塑界に於ける一大結社を作り、以て技を鍊る事と彫刻界の刷新とを期したのである。そして帝展審査議會などにも調和的に向ふつもりらしかつたが他方では、新海、高村、山崎、北村、四海、米原氏等を後楯に、北村西望、建昌兩氏、これに池田勇八氏など中心又參謀となつて、別に『曠原社』なるものを作つたので、東臺彫塑會と曠原社は正に拮抗するに至つた。この頃が彫刻界紛争の極點であつたと云へよう。〔下略〕

⑪ 工芸美術會（新興美術會）

明治末期に始まつた工芸の官展併置運動は大正八年、帝國美術院設置を契機として活発化する。同年、国民美術協會による帝展への工芸参加要請書提出、裝飾美術家協會の誕生に続いて、十一月十一日に本校出身の工芸美術家による組織、工芸美術會が成立する。工芸美術會は、正式名称を新興美術會とし、規則書とともに次の趣意書を發表した。

◎新興美術會趣意書

大戦の終熄は茲に一變して世界改造の氣運を打開し來る 此時に當りて吾人工藝美術に従事するもの亦儉安姑息以て足れりとす可きに非るなり 顧ふに明治時代に於ける工藝美術は稍其世運の進展に伴ひ光華燦然たるものありしかと幕末墮落の宿弊を受けて所

謂様に依て胡蘆を畫けるもの亦少からざりしか爲に世の工藝美術を見る事極めて軽く因襲の久しき今に尙僅に藝苑の末班に列すと爲し或は正に一籌を繪畫彫塑に輸せりと爲す 共に謬れるの甚しきものにして畢竟するに均しく理想の之に逆發せる所以を解せざるものゝ言たるに過ぎずと雖とも一面作家の態度亦憚焉たらざるものありしに職由せずんばあらず 然も現時猶過渡期に屬し或は舊法を墨守して巧に誇り他は新様を追ふて徒に奇を衒ひ渾然醜熟能く醇境を拓開するものあらず 世人をして益工藝美術の眞趣を解せざらしめ斯道の發展之が爲に塞かれ社界の待遇重きを加へず作家の地位向上するに由なし 眞に慨嘆に堪えざるなり 吾人同窓の身を工藝美術界に致せるもの既に三百五十人奮起協力して以て道に盡し先づ自ら覺めて以て導かば得る所蓋し料るべからざるものありて茲に一新時代を劃出するの秋あるや必せり 仍て茲に本會の組織を企つ 冀くば 贊に吝なる勿れ

發起人(イロハ順)

石田 英一	板谷 波山	六角 紫水
堀井 政吉	千頭 庸哉	渡邊 香涯
香取 秀眞	神矢 龍珉	吉野 富雄
田雜 五郎	高野 重人	津田 信夫
辻村 松華	海野 清	野口 六三
小岩 峻	坂口 朧	澤田 誠一郎
島田 佳矣	清水 龜藏	杉田 精二

(『東京美術学校校友会月報』第十八卷第七号。大正九年一月)

同会は會員三百五十余名を有し、本校工芸部内に事務所が置かれ

た。上出月報第十八卷第八号(同年二月)に「此程實行委員を擧げ官展に工藝美術科設置の建議、並に同意を求むる爲め、文相始め帝國美術院會員宅を歴訪して意見を開陳したり」とあるように、同会は 大正九年から帝展参加運動に乗り出す。

⑫ 海野美盛死去

本校金工科主任教授海野美盛は、腎臓炎のため療養中だったが、脳溢血を併発し、大正八年九月二十二日午後五時、上野桜木町の自邸にて死去した。『東京美術学校校友会月報』第十八卷第四号の「藝苑叢報」に、本人および遺作銀製寿老及獅子置物の写真、略歴、葬儀の報告と正木直彦学校長の弔詞全文が掲載されている。また、九月二十三日の東京朝日新聞、時事新報にも逝去の記事がある。

海野美盛は、水戸派彫金の大家海野盛寿を父として、元治元年十月十五日東京下谷池の端に生まれた。幼少より美術を志し、父より金屬彫刻を学ぶとともに、酒井道一、河鍋曉齋らに日本画を学んだ。明治二十二年には古美術研究のために奈良、京都を訪れ、この期間、小倉惣次郎に就き西洋彫塑も学んでいる。明治三十一年二月に本校助教、同五月教授となる。同三十三年のパリ万博には私費を投じて渡欧。同三十六年、第五回内国勸業博覧会の賞牌製作に關して欧米に出張。同四十三年日英博覧会に際しても、審査官として渡英している。日本の伝統的な彫金技術に西洋彫刻の造形を加味、日本彫金の近代化に努めた。近く帝室技芸員に任ぜられることになっていた。

葬儀は、九月二十五日午後一時谷中斎場にて仏式で行われた。